
《論 文》

歴史的事実の誤認識における「ラベリング効果」について

工 藤 与 志 文

要 約

本研究では、日本史学習において頻出する6つの「ラベル」(縄文時代・鎖国・開国 etc.)を取り上げ、「ラベリング効果」という視座から事実認識の誤りを検討した。大学生を対象に実施した調査の結果、取り上げたすべてのラベルに関して予測された誤認識が認められ、歴史的事実をラベルの方向に歪曲して理解しているケースが少なからず存在することが明らかとなった。さらに、そのような誤認識が、江戸・明治両時代の特徴を事実以上に対立的にとらえるという偏った歴史認識の形成に影響を与えている可能性も示された。以上のことから、「ラベリング効果」という心理学概念が、歴史学習における事実認識の誤りの研究にとって有効であることが示唆された。

キーワード：歴史学習, ラベリング効果, 誤認識

問 題

歴史学習において、様々な歴史的事実とその相互関係の認識が重要であることは論を待たない。歴史教育に関しては、とかく歴史的事実の羅列とその暗記が中心であるという批判がなされ、教育目標についても様々な観点からの議論が続けられている。しかしながら、歴史教育の目標をどこに定めるにしても、重要な歴史的事実群およびそれら相互の関係を理解することが歴史学習の不可欠な要素であることには変わりはないであろう。

一方、歴史認識の形成にとって基本的な事実そのものがかならずしも正しく理解されていないという指摘もある。たとえば麻柄(1993)による大学生対象の調査によれば、徳川幕府は全国の大名家から年貢を取り上げ、全国に対して強制力と実行力を伴った警察組織を持っていたという誤った知識を持っている者が数多く存在したという。実際には、江戸時代の社会体制はいわゆる「封建制」であって、絶対王政とは異なり、地方分権がかなり認められていたわけである。江戸時代の政治体制をこのように誤解しているならば、江戸時代自体の理解が損なわれるだけでなく、封建体制から中央集権国家へ大きく変化した「明治維新」の意味をもまったく理解できないことになる。麻柄も指摘しているように、この種の基本的事実の誤解は歴史認識にとって致命的であり、同種の誤解が散見されるならばその影響は計り知れないものがあると言

えよう。したがって、歴史認識の誤りの実態を明らかにしつつ、その修正ないし発生の防止をめざした教育心理学的研究が様々な形で展開されていかなければならないと考えられる。しかし、自然認識を対象とした同種の研究の多さとは対照的に、歴史認識の誤りを扱った心理学的研究は数少ない（麻柄，1993）。そこで本研究では、歴史的事実に関する誤った認識の問題に関して「ラベリング効果」という視座から検討を加え、歴史学習に関する心理学的研究の1つの可能性をさぐることを目的とする。

「ラベリング効果」とは、ある特定の事物や状況に対する命名（labeling）がその事物・状況の認知や記憶過程に影響することを指す。「ラベリング効果」は様々な材料を用いた記憶実験によって繰り返し確認されているが、なかでもよく知られているのはCarmichaelら（1932）による実験である。Carmichaelらは、FIG.1に示したような刺激図形を用意し、その図形のみを見せる条件およびリスト1ないしリスト2に示されたラベルを与えて図形を見せる条件を設定し、それぞれの条件で記憶されその後再生された図と刺激図形を比較した。その結果、①ラベリングされた図形を記銘した被験者は図形のみを記銘した被験者よりも多くの図形を再生することができ、②ラベリングされた図形は貼り付けられたラベルの方向に歪曲されて再生される傾向のあることがわかった（FIG.1参照）。このようなラベリングによる記憶材料の変容は、記憶材料が記憶システムに取り込まれて保持される過程で生じる変化のひとつであり、ラベルが記憶の変容を惹起する「事後情報」のはたらきをしているものと考えられている（Loftus, 1979）。また、ラベリング効果は概念の学習過程にも影響を与えるとされ、概念の不適切な刺激項の諸特性についてラベリングすることにより、正しい概念の理解が妨げられる可能性のあることも指摘されている（内田，1981）。最近問題視されるようになった「精神分裂病」というラベリングの不適切性もその一例となるであろう。

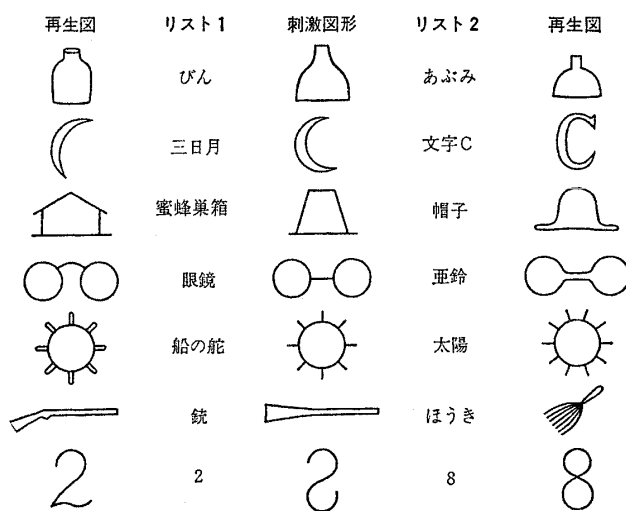


FIG. 1 ラベリングによる再生図形の変容
(Carmichaelら, 1932: 相良守次『心理学概論』岩波書店より引用)

さて、本研究において「ラベリング効果」を取り上げるのは、歴史学習において様々なラベルが重要な役割を果たすからである。歴史というのは本質的に時間軸及び空間軸にそって変化する事象連続体であり、しかもその連続体を構成する個々の事象はそれぞれユニークなものである。したがって、歴史を把握するためには時間軸ないし空間軸に沿った連続的变化の中に何らかの恒常的な要素を見だし、それらを適切に記述することが肝要である。たとえば、「時代区分」は連続的变化をいくつかの相に区分して記述するためのものであるが、区分の手がかりを各時代に広く使用された「道具」に求めるか、「支配体制」のありように求めるか、「対外政策」のありように求めるか等々によって、歴史の記述と把握は当然異なってくる。このように、歴史研究にとって適切な記述概念の構築が不可欠であると同時に、歴史の学習においてもそれらの概念及びそれを示すラベルの学習が必要となってくるのである。

しかしながら、その一方で、記述は事象連続体の恒常的要素を一定の観点から抽出したものにとどまらざるを得ず、連続体を構成する事象のユニークさは記述の過程で脱落する。同様のことは「ラベリング」にもおこり、1つの記述概念の全容を1つのラベルで記述することは不可能である。したがって、歴史学習において記述概念のラベルの学習を重視し、歴史的事実の詳細な学習をおろそかにする場合、「ラベリング効果」により歴史的事実をラベルの意味する方向へ歪曲してとらえる傾向が生じ、結果として誤った事実認識が形成されるかもしれないのである。この可能性を示唆するものとして、「鎖国」というラベルが歴史認識に与える影響がある。

正村（1996）は、“日本史の教科書で使われている「鎖国」という言葉は江戸時代の対外関係を正確に表わしていない。幕府自身は鎖国という言葉を使っていない。十九世紀（1801年）、長崎の通詞であった志筑忠雄が、1690年代に長崎のオランダ商館付医師をつとめたことのあるドイツ人E.ケンペルの『日本誌』の1章をオランダ語版を使って翻訳し、日本に紹介したとき、タイトルを「鎖国論」とした。それが「鎖国」という言葉が使われた最初といわれている。江戸時代の日本は外国に門戸を閉ざしていたわけではなかった。”と述べている。たしかに、幕府は日本人の海外渡航を禁じ、オランダ・中国といった特定の国との交易を長崎を通じてしか認めなかったとはいえ、「鎖国」体制下の日本は世界の市場と常につながっており、諸外国の製品が入ってきて国民生活に供せられる一方、多くの日本品がヨーロッパ・アジアの市場に出回っていた（岩生、1974）。さらに、幕府はオランダ商館長に当時の世界情勢に関する報告書を提出することを義務づけており、それにより海外情報を独占的に知ることができた。このように、「鎖国」はキリスト教の流入に対する防波堤としての役割を持っていたとはいえ、外国に対してむやみに「国を鎖^{とど}す」政策ではなく、むしろ幕府が外交権を独占的に保持するための政策として理解すべきものである（市村・大石、1995）。

にもかかわらず、西洋に対する遅れの原因や日本の技術・産業・政治経済の後発性の説明としての「鎖国」概念は広く認められてきた。また一方では、東アジアにおいてなぜ日本のみが

「近代化」に成功したのかという問題提起に対する答えを、「鎖国」体制下での密封された「温室社会」状態に見いだそうとする試みも多く現れた（トビ，1999）。このような「鎖国得失論」の形成に「鎖国」というラベルそのものがどの程度寄与し得たのかという問題は、心理学的にも大変興味深い問題であるといえよう。

このように、「鎖国」というラベルが後世の作であり、かつ江戸時代の対外関係を正確に表わしていないにもかかわらず、江戸幕府の対外政策を端的に示すラベルとして使用され、歴史教育においても広く用いられているという現状は、ラベリング効果という観点から見ればきわめて問題を含んだものである。それと同時に、歴史学習で頻出する他のラベルについても同様の問題が生じている可能性も示唆されるのである。そこで、本研究では、日本史の学習においてしばしば用いられるラベルを取り上げ、ラベリング効果という観点から予測される誤った事実認識を仮説的に特定し、実際にそのような誤認識が見られるかどうかを確認することとする。

方 法

1. 取り上げられた「ラベル」と調査項目

本研究で取り上げられるラベルとターゲットとなる調査項目を TABLE 1 に示す。取り上げられた6ラベルのいずれかに対応する8項目によって、ラベリング効果が検討される。各ラベルとその予想される効果について、以下で説明を行う。

1) 縄文時代

「縄文時代」というラベルは出土する土器の様式によるものであり、日本の歴史のみで通用する名称である。世界史的には「新石器時代」に相当する。教科書の歴史年表では「旧石器時代」に続いて「縄文時代」とするものが散見され、しかも土器に由来するラベルであることから、縄文時代は土器中心で石器は使われていなかったとする誤った認識が生じる可能性がある。

2) 平安時代

平安時代＝貴族の時代という括り方は多くの教科書で見られる。続く「鎌倉時代」が武士政権であることの対比もあり、武士の発生が鎌倉時代以降のことであって、平安時代には武士が存在していなかったという誤った認識が生じる可能性がある。

3) 戦国時代

「戦国時代」というラベルそのものは、戦国大名同士の争乱の時代ということで必ずしも誤解を招くものではないが、次の「安土桃山時代」「天下統一」と続くことで、戦乱の時代は戦国時代で終わりを告げたと受け取られる可能性があるだろう。実際には、「関ヶ原の戦い」をへて「大坂夏の陣」で豊臣氏を滅ぼすことによってはじめて徳川幕府の政権基盤が安定し、戦乱の時代が終わったと見るべきである（工藤，1998）。

4) 鎖 国

「鎖国」のラベリング効果に関しては前述の通りである。江戸時代はいつさいの対外関係を絶っていたという誤った認識が生じる可能性がある。

5) 王政復古

教科書の明治維新を扱った部分では「王政復古の大号令」を取り上げることが多い。武士政権成立以降、教科書に大きく取り上げられる天皇は後醍醐天皇以外ほとんどないこととも関連するが、「王政復古」の意味を廃絶された天皇家の復活と誤解する可能性がある。

6) 開 国

「開国」というラベルの意味は「鎖国」の反対であることから、鎖国とは様々な意味で対比的にとらえられやすく、鎖国＝江戸幕府の対外政策、開国＝明治政府の対外政策と図式的に理解される可能性があるだろう。だとすれば、開国したのは江戸幕府ではなく明治政府であるという誤った認識が生じる可能性がある。

TABLE 1 取り上げたラベルと調査項目

ラベル	調 査 項 目
縄文時代	① 縄文時代にも「石器」は使われていた。
平安時代	③ 歴史上「武士」が登場するのは「平安時代」からである。
戦国時代	⑤ 「戦国時代」が終わり「安土桃山時代」に入ると、大きな戦乱はおこらなくなった。
戦国時代	⑦ 江戸時代は長く平和の続いた時代であり、大きな戦乱はなかった。
鎖 国	⑧ 江戸幕府は当初、外国との貿易をさかんにしようとしていた。
鎖 国	⑩ 江戸幕府の「鎖国」政策により、外国との貿易はとだえた。
王政復古	⑬ 江戸時代には「天皇家」はとだえていたが、明治時代になって復活した。
開 国	⑭ 明治政府はペリーの要求をこぼみきれず、「開国」を決断した。
非ターゲット項目	② 「平安時代」と「江戸時代」を比べると、平安時代の方が長い。 ④ 「天下統一」をはたしたのは織田信長である。 ⑥ 「関ヶ原の戦い」で勝ったのは徳川家康である。 ⑨ 江戸幕府は全国の農民から年貢をとりたてていた。 ⑪ 「参勤交代」は、大名を経済的に苦しめるために、幕府が作り出した制度である。 ⑫ 長崎「出島」での交易がみとめられた国はオランダである。

※質問項目の番号は、調査用紙上で付された番号である。

2. 手 続 き

A4版1枚の調査用紙を配布し、6つのラベリング効果を測定するための8つのターゲット項目、および取り上げられたラベルと関連を持つ日本史上の事実に関する非ターゲット6項目（TABLE 1 参照）の計14項目について、それぞれ正しいと思うか、まちがっていると思うか、わからないか、判定を求めた。続いて、日本史にどのくらい興味があるか、「歴史」は得意教科であったかについて、それぞれ4件法（かなり興味がある・たいへん得意であった——どち

らかといえは興味がある・どちらかといえは得意であった——あまり興味を持っていない・どちらかといえは苦手な教科であった——全く興味がない・たいへん苦手な教科であった) で評定を求めた。回答のペースは各自にまかせた。

3. 調査対象および時期

調査対象は札幌学院大学1, 2年生105名であり, 「教育心理学」の講義時間内に筆者の指示の下でなされた。所要時間は約15分。調査時期は2001年7月であった。

結果と考察

1. ターゲット項目について

各ターゲット項目に対する反応を TABLE 2 に示す。ラベリング効果に関する8項目すべてにおいて予想された誤反応がみられた。そのうち, 全体の3分の1を越えた人にラベリング反応が見られた項目が5つあり, さらに③⑩⑭では半数を超えた人にラベリング反応が認められた。さらに, 全8項目中4項目以上でラベリング反応をした41名(全体の39%)を「高ラベリング反応者」として抽出し, その回答状況を調べたところ, ③⑧⑩⑬⑭の5項目に突出したラベリング反応が見られることがわかった (FIG.2)。さらに, 高ラベリング反応者の反応パターンを見ると, ③⑧⑩⑬⑭の5項目すべてでないいずれかの4項目にラベリング反応を示した者は31名(高ラベリング反応者の76%)に上っていた。これらの結果から, 高ラベリング反応は特定の項目群において集中的に見られるとともに, 高反応者1人ひとりの反応においても同じ項目群に反応が集中していることが明らかとなった。したがって, このような反応の集中がおこった理由を考察するには, それぞれの項目におけるラベリング反応の関連性に目を向ける必要があるだろう。

TABLE 2 調査項目に対する反応

ターゲット項目

ラベル	縄文	平安	戦国	戦国	鎖国	鎖国	王政復古	開国
項目番号	①	③	⑤	⑦	⑧	⑩	⑬	⑭
正しい	86	33	<u>10</u>	<u>26</u>	49	<u>55</u>	<u>40</u>	<u>69</u>
まちがい	<u>15</u>	<u>56</u>	83	73	<u>47</u>	43	48	26
わからない	4	16	7	6	9	7	17	10
無回答	0	0	5	0	0	0	0	0

非ターゲット項目

項目番号	②	④	⑥	⑨	⑪	⑫
正しい	23	35	87	84	60	91
まちがい	68	66	13	11	32	12
わからない	14	4	5	10	8	2
無回答	0	0	0	0	5	0

※数字は人数。太字が正解。下線はラベリング効果から予想される反応

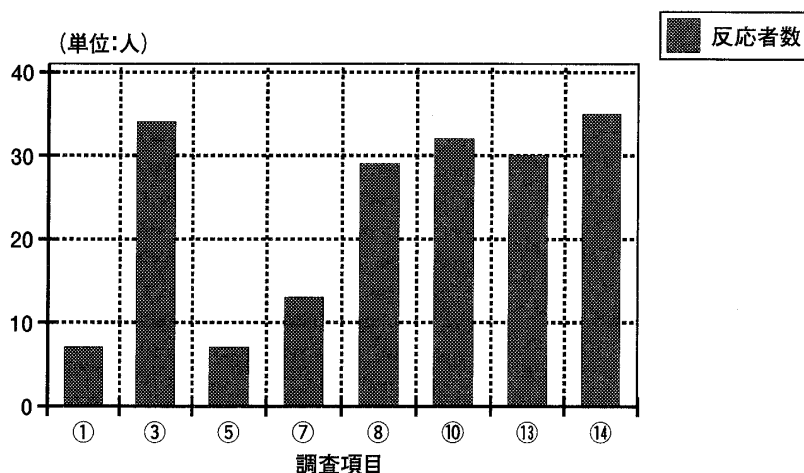


FIG. 2 高ラベリング反応者における項目ごとの反応者数

③⑧⑩⑬⑭のうち、③以外の4項目は江戸時代および明治維新に関するものであり、「鎖国」「開国」「王政復古」というラベルと関連している。しかも、これら4項目におけるラベリング反応は、江戸時代と明治時代それぞれの特徴を事実以上に対比的にとらえる方向で作用している。TABLE 3は、ラベリング反応の背景にあると想定されるところを図式的に表現したものである。高反応者は江戸時代と明治時代に関して過剰に対立的にとらえ、このような単純化された認識を持っているものと想定される。これらの結果は、個々のラベリングが持つ効果を越えて、複数のラベリングがある一定の方向性を持った歴史認識の歪みを生じさせる可能性を示すものといえるだろう。なお、③におけるラベリング効果が「武士が登場するのは江戸時代」という誤認識を背景としているとすれば、これもTABLE 3の図式と何らかの関係を持っているのかもしれない。

TABLE 3 ラベリング反応から推定される江戸・明治時代の歴史認識

江戸時代	明治維新	明治時代
江戸幕府が統治	←→	明治政府が統治
将軍（武士）中心の政治	←→	天皇中心の政治
天皇家は断絶	←→	「王政復古」で天皇家復活
外交政策は「鎖国」	←→	外交政策は「開国」
貿易の禁止	←→	貿易を奨励

2. 非ターゲット項目について

調査項目には、取り上げられたラベルと関連する事実を扱った非ターゲット6項目が含まれていた。それらに対する反応はTABLE 2に示されている。項目によって反応のバラツキは大きいですが、④⑥⑫といった単純な事実に関する項目では正答者が多い。一方、「⑨年貢」「⑪参勤

交代」といった幕府の政策に関する項目では正答者が少ない。江戸幕府が全国から年貢を取り立てていたと考える者が多いという結果は、麻柄（1993）の指摘を裏付けるものである。

これら調査項目のうち、ラベリング反応との関連で興味深いのは、⑫である。全体の9割の者が、オランダとの交易について正しく知っていたことが結果から読みとれる。一方、すでに述べたように「⑩江戸時代は外国との貿易がとだえた」については、これを正しいとする者が全体の半数も存在している。これらの結果は、オランダとの交易を知っていながら「貿易のとだえた江戸時代」という認識を持ちあわせている者がかなり存在していることを示唆している。同じ調査項目の中に両項目が含まれているにもかかわらず、矛盾した反応であることに必ずしも気づかないという点から、ラベリング効果の「根強さ」をうかがうことができよう。

3. ターゲット項目と非ターゲット項目との関連

ターゲット項目と非ターゲット項目に対する反応間の関連をさらに検討するため、正答した非ターゲット項目の合計とラベリング反応数との間に関連があるかどうかを検討したが、特筆すべき関連は認められなかった。そこで、非ターゲット項目それぞれとラベリング反応数との関連を調べたところ、項目④に正答した者はラベリング反応数で偏りが無いのに対し、誤答した者についてはラベリング反応数が少ない方向に偏るという統計的に有意な関連が認められた（TABLE 4 参照： $\chi^2=4.68$, $df=1$, $p<.05$ ）。項目④で関連が認められた理由には、他の項目に比べて正解・不正解の偏りが小さく関連を抽出しやすかったということもあるが、「天下統一したのは織田信長である」を正しいとするような基本的事実すら正確に認識していない者にラベリング反応が少ない傾向が認められたということは、興味深い事実である。

TABLE 4 ラベリング反応数と項目④との関連

ラベリング反応数	0～3	4～6
項目④で正解	35	31
項目④で不正解	29	10

4. 「興味」「得意」に関する評定との関連

調査項目には、日本史にどのくらい興味があるか、また歴史はどのくらい得意教科であったかを評定させる項目が含まれていた。それぞれの評定とラベリング反応との関連を検討するため、4件法による評定値にもとづいて被験者を2分し、ラベリング反応数とのクロス集計を行った。その結果、「得意」評定とは関連が認められなかったが、「興味」評定とラベリング反応数との間には若干の関連が認められた（TABLE 5 参照）。すなわち、「たいへん興味がある」ないし「どちらかといえば興味がある」という評定者ではラベリング反応数に偏りが見られないのに対し、「あまり興味がない」ないし「全く興味がない」という評定者ではラベリング反応

数の少ない方向に偏るという傾向が認められた ($\chi^2 = 3.62$, $df = 1$, $p < .10$)。日本史に興味を持たない者でラベリング反応が少ないという結果は、上記の非ターゲット項目④でみられた連関と類似しており、その意味を理解するには両結果を総合的に考察する必要があるだろう。

TABLE 5 ラベリング反応数と「興味」との関連

ラベリング反応数	0～3	4～6
かなり興味ある・どちらかといえばある	30	27
あまり興味ない・まったくない	34	14

討 論

1. 歴史認識形成におよぼす「ラベリング効果」の影響について

本研究では、ラベリング効果という観点から、歴史的事実認識における特定の方向性を持った誤りの存在を予測し、その確認を通じて歴史学習研究に対する心理学の寄与の可能性をさぐることを目的としていた。その結果、ターゲット項目すべてにおいて予測した方向での誤反応が確認された。以下、誤反応の背後にあると思われる基本的事実の誤解を列挙してみる。

- 1) 縄文時代には石器は使われていない。
- 2) 平安時代には武士は存在していない。
- 3) 戦国時代が終り、戦乱のない平和な時代になった。
- 4) 江戸幕府は外国との交渉をいっさい禁じていた。
- 5) 明治時代になるとそれまで途絶えていた天皇家が復活した。
- 6) 開国を決断したのは明治政府である。

これらの誤解は、それ自体が問題であるだけでなく、それによって歴史認識の発展が阻害されるおそれがあるという点できわめて重大であると言わざるを得ない。たとえば、2) は平安時代における荘園制の拡大と武士の発生との関連をよく理解していないことを暗示しているが、もしそうだとすれば、貴族ないし公家と武士の関係およびその後の歴史での両者の権力闘争の意味が十分理解されないことになるだろう。また、3) については、徳川氏と豊臣氏の闘争、豊臣方封じ込めによる支配体制の確立、譜代大名と外様大名の配置などについての理解を阻害するおそれを指摘できる。さらに、6) は、幕府の独断による「開国」とそれに対する反発としての尊皇攘夷運動、倒幕運動について根本的な理解の妨げになるだろう。このように、歴史学習という観点からみた場合、「ラベリング効果」は関連する歴史的事実の相互関係の認識に大きな影響を与えうるという点で見逃すことができないものである。TABLE 3 に示したような過剰に単純化・図式化された歴史認識の存在がうかびあがってきたことは、この可能

性が単なる推測で終わっていないことを示すものであろう。

このように、「ラベリング効果」は歴史的事実の誤認識を考える上で一つの視座を提供するのみならず、偏った歴史認識の形成因のひとつとして注目されるべきものである。ラベリングが歴史認識形成に与える影響について、今後さらに広い観点からの研究が待たれるところである。

2. 測度間に認められた連関について

ラベリング反応数との間に連関が認められたのは、「非ターゲット項目④」と「日本史に対する興味」という二つの測度で得られた結果のみであった。すなわち、④に正解した人あるいは日本史に興味を持っている人ではラベリング反応数に偏りがみられず、④に不正解だった人あるいは日本史に興味を持っていない人では反応数が少ない方向に偏る傾向が見られた。つまり、「天下統一」に関する基本的な事実すら正しく理解していない、あるいは日本史に興味を持っていないといった歴史学習に対するネガティブな要因が、ラベリング反応という事実認識の誤りと負の連関を示しているわけで、一見、常識的な予測に反する結果となっている。残念ながら現段階では、これらの興味深い連関の意味を、ある程度の確実性を持って解釈するためのデータを欠いている。そこでここでは、ある解釈をひとつの可能性として提示するにとどめたい。それは、ラベリング反応自体が、学習者の歴史的事実に対する一貫した解釈の試みであることとらえることである。つまり、ラベリング反応はラベルを貼り付けられることで必ずしも自動的に生じるのではなく、事実関係をラベルに合うように一貫性を持たせて解釈しようとする「構え」を持つことによって生じやすくなるのである。この点について論じるには、Ausubelの有意義言語学習理論が参考になるであろう。

Ausubel & Robinson (1969)によれば、有意義言語学習が成立するには、学習材料と何らかの関連を持ち、それを認知構造内につなぎとめる働きを持つ観念が存在するだけでなく、学習材料とその「つなぎとめ観念」を関連づけようとする「学習の構え」が必要であるとしている。そして、これらの条件を欠いた場合、学習はかぎりなく暗記学習に近づいていくとも述べている。本研究の文脈では、ラベルが歴史的事実群に対する「つなぎとめ観念」に相当するといえよう。そして、歴史学習に対してネガティブな要因を持ち合わせた者は、関連づけて学習する「構え」を持たず、それぞれの個別事実の暗記学習に頼る傾向が強かったのではないかと仮定すれば、ネガティブな要因とラベリング反応の負の連関を一応説明することができるだろう。言い換えるなら、歴史学習の方略の違いがラベリング反応の生起に影響し、多くの事実を相互に関連づけないうまま暗記学習をする方略をとるならば、むしろラベリング反応は生じにくくなるのかもしれない⁽¹⁾。

いずれにしても、本研究で見いだされた「連関」の意味を探るには今後の研究を待たなければならない。特に、学習者の歴史的事実に対する知識の乏しさ、あるいは歴史に対する興味の

なさといったネガティブな要因と歴史学習の方略との関係, そしてこれら諸要因とラベリング効果との関係については, 今後の研究課題としておく。

註 (1) ラベリング反応が少ないということは, 必ずしも個々の事実を正確に知っていることを意味しない。というのも, 非ラベリング反応には「正解」の他に「わからない」「無回答」といった判断保留も含まれているからである。

文 献

- Ausubel, D. P. and F. G. Robinson (1969) *School Learning: An introduction to Educational Psychology*. Holt, Rinehart and Winston.
- Carmichael, L., H. P. Hogan, and A. A. Walter (1932) An experimental study of the effect of language on the reproduction of visually perceived form. *Journal of experimental psychology*, 15, 73-86.
- 市村佑一・大石慎三郎 (1995) 鎖国=ゆるやかな情報革命 講談社現代新書
- 岩生成一 (1974) 鎖国 日本の歴史14 中公文庫
- 工藤与志文 (1998) 戦国・江戸時代に関する子どもたちの「先入観」について わかる授業の創造 Vol.4, No.1 39-43.
- Loftus, E. F. (1979) *Eyewitness testimony*. Cambridge: Harvard University Press.
- 麻柄啓一 (1993) 誤った知識を修正しやすい説明文の条件について 読書科学, 37, 34-41.
- 正村公宏 (1996) 世界史のなかの日本近現代史 東洋経済新報社
- ロナルド・トビ (1999) 変貌する「鎖国」概念 永積洋子編「鎖国」を見直す 山川出版社
- 内田伸子 (1981) ラベリング 心理学事典 平凡社

“Labeling Effect” on Misconceptions in Studying History

KUDO, Yoshifumi

Many psychological experiments have shown that the labeling of an event often has distortional effects on cognitive processes. This study aims to consider the misconceptions that result in the study of history, from the viewpoint of “labeling effect”. 105 undergraduates were asked to answer several questions about historical events with labels frequently found in textbooks on Japanese history (the Jomon era, Edo isolation policy (sakoku), emergence from isolation (kaikoku), and three other labels). The results indicated that most of the subjects wrongly understood some historical facts, and that their misunderstanding was thought to be caused by the literal meaning of each label. For example, the Edo and Meiji eras were understood to be periods of exaggeratedly conflicting ideas. It is suggested that “labeling effect” is a useful psychological concept for studying misconceptions held by history students.

Key words: study of history, labeling effect, misconception

(くどう よしふみ 本学人文学部助教授 教育心理学専攻)